

空を飛ぶこと

帯広市医師会
北斗病院

向井 耕一

5年前に自家用操縦士になってから、空を飛ぶことの奥深さにはまり込んでいる。

救命センターでの後期研修中はERとICUに籠もって病棟からのコールとホットラインの音に胃を痛くしながら3年間を過ごしていたが、その間「このキツイ研修が終わったら、日本から一度出て今までやらなかったことに挑戦してみよう」と心に決めていた。

横浜市の一角、あまりにも狭すぎる生活圏の中心地（またの名をICU）で、電カルを見るふりをしながらヒソカに「海外 はじめて」などネット検索していた。でも何をやるか？ 今さら語学留学も合わない気がする…お、なんだ？ アメリカでパイロットの免許をとろうだって？ これだこれだ！ おれはヒコーキが好きだ！ 後期研修が終わったらこのキツくて狭いハコから逃げ出してアメリカに行つてやるぞ！ 未知なるフライトに期待を抱くことで疲弊しきった心身も少しは元気になった。なんとか救急の研修を乗りきった。

アメリカのネバダ州ラスベガスにほど近い地方の空港で、初めて小型機の操縦桿を握り空から灼熱の砂漠やカジノの夜景を見た。フライトの魅力にとりつかれた。単独飛行の許可をもらってからは、晴天続きのネバダ、カリフォルニア、アリゾナの大小の空港へ飛んだ。いろいろな経験をしてprivate pilot（自家用操縦士）のライセンスを頂き、無事帰国した。

帰国後も日本で飛ぶための手続きを終えて週末を中心にフライトを続けた。日本はネバダとは違い天候が変わりやすく、また独自のルールがあり慣れるのに苦労した。

ある日、横浜上空を飛んでいたらかつての研修病院を発見した。上から見下ろすと小指の爪くらいの大きさであり、完全に周囲の街や人工物に埋もれている。なんだ、あんな小さな建物の中にかつての自分の生活のほぼ全てがあって、喜怒哀楽が満ちあふれていたのかと思うと、なんだか笑えた。

小型機は、特別な技術や過度の注意力を要することなく操縦できるように設計されている。悩ましいのは離着陸など操縦そのものよりもフライトを組み立てることだと思う。雲の上には道路標識はなく、先人の足跡は空には残らないし、途中で止まって道を探すわけにもいかない。地図や計器などを参考に、自分でその日飛ぶルートなどをきっちり考えないといけない。流動的な気象条件の中、自然の法則や機体の性能や航空法に従って離陸を決断し、目的地にたどり着くかどうかはまさにパイロットの判断次第で、そこに小型機の果てない奥の深さ・面白さを感じる。

速度や定時性において大型ジェット機にはとても敵わないが、小型機なりのメリットはある。小さな飛行場でも離着陸可能で、機体の導入維持の敷居が比較的低い。特に輝くのは北海道、長崎や沖縄など離島エリアでのフライトだと思う。

当院の多大寛大なサポートにより、とてもありがたいことに最近またフライトの機会が増えた。しかも新たな試みとして、医療スタッフ搬送もやらせていただいている。まだまだ修行中だが、小型機を利用した医療活動の場を今後は北海道から南方の島嶼地域まで広げていきたいと考えている。

